

週日の説教

金 大烈 神父 2010年3月23日(火)

《生体性》

今日の福音(ヨハネ 8・21 30)には、日本語では分かりにくい言葉がありましたね。それは「わたしは**ある**」です。この言葉は、ユダヤ人に特有の表現です。「もとから、初めから、神様と一緒にいた存在である」という意味だと理解してください。つまり、「神様と等しい存在」、「神様と同じ存在」という意味です。そして、次の箇所を読んでみると「**わたしが、自分勝手には何もせず、ただ、父に教えられたとおりに話していることが分かるだろう。**」と書いてあります。これはたんに「神様である」ということではなく、「この世が作られる前から神様と一緒にいた存在である」ことも含めている言葉です。誰かに意味を聞かれたら、このように答えればよいでしょう。

さあ、今日の福音で目についたのは、「**あなたは、いったい、どなたですか**」という言葉です。つまり「あなたは、誰？」、もう少し難しい言葉にすると「あなたの正体は何ですか？」になります。

日本でも流行した『アイデンティティ(Identity)』という言葉がありますね。1980年代ごろ、「アイデンティティの喪失」とか「正体性の喪失」という言葉がよく使われました。これは、ある社会学者が「人間とは何だろう」、「宗教とは何だろう」といろいろ悩み、流行させた言葉です。しかしこの言葉はそれ以前からあった言葉です。ラテン語の「イデンティタス(Identitas)」が英語式発音になって「アイデンティティ」になったのです。「アイデンティティ」というのは、「あなたの正体は何だろう？」という概念です。

さあ、ユダヤ人たちがイエス様のお話を聞いて、「あなたは、いったい、どなたですか」という質問をしましたね。これは、人々がイエス様にした質問です。しかし逆に、神様・イエス様が皆様に「あなたは誰？」「あなたの正体は何？」と聞かれたら、皆様はどのように答えますか。いろいろな人から「あなたは誰？」と質問されますが、本当はまず自分から自分に質問しなければならない問いかけです。自分に対して「あなたは誰か？」という質問をしなければ、私たちは正体性を失ってしまいます。

私も含めて皆様は、いろいろな名前を持っていますね。まず「人間」です。次に「男または女」、「日本人とか韓国人、ペルー人・・・」、「群馬県民」、「太田市民」、「太田カトリック教会の信者」、「歳代の人間」・・・。数えきれないくらいたくさん自分を表す言葉があります。その中で、人に自分を表すために使う名前ではなくて、自分に対して答える名前は何でしょうか。いろいろな飾りを使って自分を表すことを『正体性の装飾』と言いますが、絶対に飾りで自分を表そうとしないでください。

さあ、「私たちは誰ですか？」。答えは一つしかありません。それは何でしょうか。イエス様が洗礼者ヨハネから洗礼を受けられたとき、天から声が聞こえましたね。「これは、わたしの愛する子」と。私たちの正体は、『神様に愛される子』です。それをはっきり刻むことができれば、イエス様のみ旨に従おうとする生き方が外面にも内面にも自然に表れると思います。自分に聞いてみましょう。「あなた

は誰？」その答えは、「神様に愛されている子」です。そういう意識が強ければ強いほど、「自分がどれほど神様のみ心を痛めているのか」、「どのようにすればそのみ旨に従うことができるのか」、「どのようにすれば過ぎ去ってしまう無駄なことを追いかけないですむのか」、「どうすれば立ち上がれるのか」、「どうすれば死の病から自由になれるのか」その答えが出るのではないかと思います。結局、イエス様の言葉の中心は、「過ぎ去ってしまうことに魂をかけないようにしなさい」ということです。

皆様、今日の福音をとおして、「私は『神様に愛される子』である」ことを、もう一回感じてみましょう。それを認めることができれば、私たちと関わっている全ての人に対しても大事にする心が許されると思います。「この人も同じように神様に愛されている」と思えるでしょう。そうしたら、私がその人を憎んだり、軽んじたりすれば、私を愛しているイエス様の心をどのくらい痛めるか、すぐにわかります。そのような気持ちで少しずつ少しずつ正しい正体性を感じるために動きましょう。

ありがとうございました